

---

# TRUMP?

四季 華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TRUMP?

### 【Zコード】

Z0948Y

### 【作者名】

四季 華

### 【あらすじ】

この世界には妖達が蔓延つてゐる。

そう口々に伝えられたのは、今より何代前の人間達までだつたどう。

今や人々は妖を畏れることなく、非科学的なものとして笑い飛ばす。いるはずない、と。

廃れていく現代において、その店は時代の流れに逆らつて存在していた。

### 『四季文房具店』

又の名を、妖万屋。

ひつそりと建つ古ぼけた文房具店に、救いを求める人や妖は少なくない。

妖万屋である四季春一と妖怪達が織り成すアクション・ファンタジ

|

## プロローグ（前書き）

シリーズ、TRUMPの二部作です。

今作品だけでなく、前作も読んでいただけた幸いです。

## プロローグ

### プロローグ

この世界には妖怪が蔓延つていて。

そう伝えられたのは今よりも何代も前の人間達までだつた。今の人間達は、妖怪の存在など笑い飛ばす。いるはずない、と。先祖たちが作ったまやかしの存在だと。

しかし、妖怪は現存する。その息の根をひっそりと殺しながら。人間達に紛れ、その正体を隠しながら、この世界に棲んでいる。

人間達の無理な経済成長についていけなかつた妖怪達は、今や世界の隅に追いやられている。本来共存していたはずの人間と妖怪は、人間主体の世界になつたまま、今回つてている。

人間と妖怪の均衡が崩れ、世界は不安定で無秩序な状態を保持していた。

そんな妖怪達が存在する現在の世界に、妖怪達の力になつて立とうという人間がいる。人間達に虐げられる妖怪達の力になり、道を踏み外し罪を犯す妖怪達を正す存在。それが四季文房具店副店主の四季春一である。

四季春一という一人の少年こそ、妖怪のみが放つ妖氣という気を感じ取ることができ、それ故に妖怪と人間の間に立つ者である。妖怪屋といふ看板を掲げ、日々妖怪と向き合つてゐる。

彼をサポートするのは助手兼四季文房具店長の夏輝、そして春一の幼馴染である七紀丈、五木琉妃香、少年課の藤刑事、情報屋の夢里。

妖怪世界にも秩序がないわけではない。枢要院と呼ばれる妖怪世界の警察のような組織が妖怪達を取り締まつてゐる。しかし、彼らも妖怪だけに、人間との諍いの時には出られない。そんな時にも春一が動く。妖怪についての全ての揉め事に首をつっこんではそれら

を解決していく。それが四季春一の正体であり、妖万屋の仕事だつた。

彼を支える一人の幼馴染。丈と琉妃香に加え春一の三人は、かつてトランプと呼ばれ恐れられた伝説のチームである。春一の「一」が表わす「エース」、丈が表わす「ジョーカー」、琉妃香の「妃」が表わす「クイーン」が切り札ということで、その名前がいつしか勝手につけられた。本人たちは不良とみられることに不満を感じていたが、今もそのチームワークに乱れが起こることもなく、寧ろ絆を深めながら事に当たっている。

春一は今日も自慢のバイクを駆りながら、妖怪と人間の間を取り持つ仕事に向かう。

### 「夏、海行こう」

日本の真ん中あたりに位置する県の西部地域にある数珠市。その小さい市の中に、四季文房具店という古ぼけた文房具店がある。家と店舗が一緒になつていて、一階は店舗、二階は居住スペースとなつていた。文房具店内には、小銭で買える鉛筆消しゴムから、諭吉が何人か要るほどの高級万年筆まで並べられていた。そして店舗へと直接階段でつながつている二階のダイニングでは、春一がソファにうなだれながら夏輝に話しかけていた。

四季春一。彼の垂れた目にはやる気が感じられず、短めに立った茶髪のサイドには銀色のメッシュショウが三本入っている。耳にはピアスが一つ、行儀よく並んでいた。服装はいたつて不良で、胸元がはだけた黒いYシャツにジーンズをはいていた。百七十七センチという長身をソファに埋めて、だらけている。対する夏輝は細長の優しさであふれている目に、整つた顔立ち。少し長めの黒い艶やかな髪をしっかりと整え、白い清潔なYシャツと黒の折り畳のついたズボンをはいていた。春一よりも十センチ背が高く、姿勢よく椅子に腰かけている。この二人の写真を額縁に入れるのなら、優等生と劣等生、そんなタイトルを付けて飾つておきたいくらいだ。

「もうすぐ九月ですよ？」

「まだ八月だ」

夏輝のいつもの敬語に、春一は堂々と返す。年齢で言つたら夏輝の方が七つ年上なのだが、彼はいつも敬語で喋る。妖關係になると春一が師匠になるからだ。彼の元来の癖というものある。

「数珠海岸の海の家は八月三十一日までやつてゐる。つまり、明日までは海が開かれている。というわけで、行こう

「何で突然」

「一言で言おう。暑いからだ」

今年の夏は猛暑日が続いた。夏の間、太陽はじゅやら休むことをしなかつたようで、日差しはさんさんと降り注ぎ、人々の体力と水分を奪つた。涼を感じられるグッズが飛ぶように売れ、試しに四季文房具店でもアイスを売り始めてみたら即完売した。春一は「冬は肉まんかな」などと言つてゐる。

九月を前にした現在でも猛暑は続き、夜になつても熱帯夜の毎日だつた。

「何故今日なのです?」

「今日は特別暑い。そしてこの時期なら宿題に追われる学生諸君が家に閉じこもつてゐるから、海も空いてきただらうといふ俺の推理による」

「ハルじゃないんですから、みんな宿題はもう終わらせてますよ」「俺は小学校から高校まで、宿題を夏休みの最後にやつたことはない」

「どうせ、そもそも宿題をやらなかつたんでしょう?」

「小学校一年生の時は怒られたが、二年目からは先生たちも諦めて何も言われなくなつた」

はあ、と溜息をつく夏輝に舌を出してから、春一はよつやくソファから腰を浮かした。

「とにかく、俺はもう海モードだから、海に行こう」

かくして、春一達は海へと乗り出した。海はまだ人がいっぽいで、砂浜のそこかしこにパラソルやシートが敷いてある。

「おー、俺海久しぶりだヨ！」

「ハル、誘ってくれてありがとー」

幼馴染の丈と琉妃香も誘つたら、二つ返事で来るというので、彼らも車に乗せて海にやつてきた。丈は春一よりも明るい茶髪に黒いメッシュを三本入れ、幼さが残る顔ではしゃいでいる。琉妃香は肩の少し下まである金髪をカールさせて、その大きな瞳を輝かせている。

それぞれ水着に着替え、海の家近くの空いているスペースに腰を下ろす。

「お、おいジヨー」

「あ、ああ、ハル」

春一と丈は一人でそわそわしていた。理由は琉妃香にある。

「二人とも何下ばつか見てんの？カニでもいるの？」

琉妃香のビキニ姿がとてもなく可愛く、艶めかしさすら醸し出しているため、二人は今更になつて幼馴染を直視できなくなつたのだ。

「な、なあ、琉妃香つてあんなに女っぽかつたつけ？」

「知らねーヨー！」

小声でこそそと話している春一と丈に、琉妃香が近づく。すると二人とも顔を赤くして急いで視線を空へと逸らした。

「ははーん、さてはあたしの水着姿に見とれてるな？」

「んなわけねーだろ！お前の水着姿なんてしょっちゅう見てたしよ

「そうだぜ、小学校も中学も一緒に水泳の授業やつた口！」

「それスクール水着だろ！」

琉妃香が二人の頭を引っ叩く。二人は前につんのめつて、そこを琉妃香に体当たりされて砂に倒れた。

「お前ら埋めてやるーか？」

悪戯っぽく笑う琉妃香に、二人はたじたじだつた。

「あれ？ 夏兄水着じやないの？」

春一と丈が顔を見合わせてどうしようかとしているときに、琉妃香が夏輝に話しかけた。夏兄というのは、琉妃香なりの呼び方だ。当の夏輝は、ショートパンツにシャツを着て、ボタンはいつもよりも外しているものの、水着ではない。砂浜で観覧を決め込むらしい。

「もう海で遊ぶ年でもないので」

控えめに断る夏輝に、琉妃香はつまらなそうに足で砂をかけた。

夏輝は口の中に入った砂を吐き出している。

「ナツちゃん、ノリわりーナ」

「こいつ、名前は夏のくせに夏苦手なんだよ。暑いとすぐばてる」「おもしれー

「あたし海入つてくるよー」

琉妃香が一足先に海へと向かつ。夏輝はシートの上に座り込んで、春一と丈は砂浜にうつぶせになつて寝ている。

「女の子は元気だねー」

「若いしナ」

「それを言つたら私はどうなるんですか」「

なんてくだらない会話を三人の男たちでしていると、水の中に入つて出てきた琉妃香に一人の男が近づいた。ナンパのつもりらしい。三人は特に心配もせず、それを見守っていた。琉妃香のことだから、その内平手打ちの一発でもかまして立ち去るだらう。

しばらく男の方が話していても、琉妃香は聞く耳を持たなかつた。そつぽを向いて、小さい子供に手を振つてゐる。そこで男が強引に琉妃香の手を掴んだ。すると、すかさず反対の手が男の頬に飛んで

きた。

「ほら、やつぱり」

「かわいソー」

しかし、それでも男は諦めない。無理やり腕を引っ張つて、琉妃香を連れて行こうとする。

「行きますか」

春一がそういうと、丈と一人で男の方に近づく。春一が男の後ろからがしつと肩を組んで、丈が下から睨みを利かせる。

「こんちはー。俺らの幼馴染に何か用すか?」

「おにーさん、いい年こいてそんなことすると俺ら黙つてないつす三?」

「あああああ!」

一人が出ていくと、男は突如大きな声を出してその場にへたり込んだ。尻餅をつく格好になつた男は、がくがくと震えて三人を指さしている。

「何?俺らまだ何もしてないけど」

「あ、あんたら、トランプだろ!すみませんでしたつ、トランプの方だとは知らずに……。オレ、中学の時アンタラに喧嘩売つて返り討ちにされたんですよ、すみません、もうしません!」

三人は中学時代の記憶を一つずつ思い出していつたが、どうにも出てこない。彼らに中学時代喧嘩を売つて返り討ちにされた人間など、数知れない。

「あ、あのつ、オレやこの海の家の店主なんです。何でもタダでいいんで、許してください」

そういうて男は海の家へと駆けこんだ。三人はぽかんとその場に立ち尽くした。

「きやあつ！」

叫び声が上がったのは、四人が砂で山を作っていた時だった。琉妃香が砂で山を作ろうと言い出し、それならばトンネルを開通させようと丈が言い出し、そしてそれなら水が必要だと春一が言った。結果として、夏輝がバケツに水を汲みに出されたのだが、彼が水際から春一達の元へ帰るとき、叫び声が上がった。夏輝が振り返ると、一人の女の子が溺れていた。足を吊つたのか、腕を上にあげてもがいている。夏輝はすぐに海へ飛び込み、子供の元へと泳いだ。彼が子供に手を貸すと、女の子は安心したように力を抜いて、夏輝に体を預けた。

「もう大丈夫だよ」

そのまま岸まで泳ぐと、女の子の両親と春一達が彼らを迎えた。

「大丈夫か？」

「ええ。少し水を飲んでいるようですが」

女の子は岸に座ると、何回か咳き込んで水を吐き出した。

「大丈夫？怖かったね」

夏輝が優しく言うと、女の子は彼の腹に抱き着いた。

「おい、犯罪だぞ」

「ハル！」

夏輝は女の子の頭を撫でながら、春一を見みつけた。当の春一は女の子の頭を撫ぜて、素知らぬ顔をしている。

「どうしたの？足が吊つたのかな？」

「あのね、何か引っ張られたの」

「引っ張られた？」

夏輝の問いに、女の子はこくりと頷いた。自分の足を手で握る。

「 いとな感じで、ぐいっと引っ張られたの。それで海に引き込まれ  
せりこなつて」

「 本当に？」

「 うん」

女の子の田口は微塵も嘘は感じられない。彼女は真っ直ぐな瞳で  
夏輝を見据えている。

「 すみません、 いの子変な」と言つて。『気にしないでください』

「 はあ」

母親は彼女の手を引いて、礼を述べて立ち去った。残された春一  
達は、互いに顔を見合させて煮え切らない表情をしてくる。

「 ちょっと調べるか

その春一の言葉に、全員が頷いた。

海の家はそれなりに繁盛していた。ヤキソバや冷たい飲み物、かき氷などが売られていた。先ほど琉妃香をナンパした店主の男と、アルバイトとみられる高校生くらいの少年の一人で切り盛りしているようだった。

「かき氷四つ。ブルーハワイといちじゅういつずつ」

「ありがとうございます！」

少年は春一の注文に元気よく返事して、氷を削り始めた。程なくして赤と青のシロップがかかったかき氷が四つ出来上がった。四人はそれを店内で食べながら、店主の男に声をかけた。

「あのさ、この海で今までに事故とかあった？」

「え、そ、そんなんないですよ」

春一の問いに答える店主の男は、至つて拳動不審で、怪しい。春一達がじと目で見据えると、男は居心地悪そうに体をもぞもぞと動かしながら、頭をぼりぼりと搔いた。

「ここだけの話にしてもらえますか？ そつしないとオレの商売も上がつたりですよ」

「そりゃあ、ここ」のマイナスになるよつなことはしないよ。素直に話してくれれば、だけどね

春一が軽い脅しをかけると、男は顔をひきつらせて、春一達が座っているテーブルの方までやってきて、丈の隣に座った。そして、声を潜めて周囲を気にしながら話し出した。

「実は、最近変な事件が起きてるんですよ

「事件？」

「はい。海で泳いでると、誰かに足を掴まれて水中へ引きずり込まれそうになるっていうんです。被害に遭つた人たちは今夏だけで十

人くらいになると思います。でも、すぐに手を離されて、後は何にもないっていうから、事故にもなりずに終わってるんです。こつちは評判落とされちゃたまんないから、誰かの軽いいたずらでしじうで終わらせてるんですけど、それにしたって件数が多くすぎる。今年だけですよ、こんなことが起きるの。今まで何にもなかつたのに」「春一達は顔を見合わせた。やはり、女の子が言っていたことは本当だつたのだ。

「ふーん、成程ねえ。嫌なにおいがしやがるぜ」

春一は口で器用にスプーンをいじると、食べ終わったかき氷の皿にスプーンを置いた。そして立ち上がる。

「ちょいと調査してみますか」

春一と丈は海の中に入つて様子を見ることにした。それぞれ少し距離を取つて、様子をうかがう。試しに水の中に潜つてみても、変わつたものは何もなかつた。

「！」

そんな中、春一と丈がぱつと同じ方向を見た。微かに感じられる妖気が、こちらに近づいてくる。妖気は歩くスピードで春一の方へと向かつている。春一は体勢を整えて、来るべき時を待つた。

「来たなっ！」

春一が叫ぶ。彼の右足に手が絡まり、海の中へと引きずり込まれる。春一は敢えてそれに逆らわず、水中に潜つて自分の足を掴んでいる手を逆に捕えた。目を凝らすと、相手は人魚のような姿かたちをした妖怪だつた。長い髪に、半身が魚のように尻尾になつていて。彼女はびくりと体を震わせて、逃げようとしたがそれを簡単に逃がす春一ではない。すぐに丈もやってきて、人魚は海上に顔を出した。

「琉妃香、ボート持つてきて！」

春一が岸に向かつて叫ぶと、琉妃香が小さめの筏のようなゴムボートを持ってきた。三人でそのゴムボートに乗つて、人魚の話を聞く。春一はもう手を離しているのだが、それでも彼女には逃げる気配がない。

「逃げる素振りがないってことは、観念したつてことでいいのかな？ミス・マーメイド」

「『めんなさい……』

人魚は下を向いたまま、小さな声で謝罪した。その双眸からは今にも涙が溢れ出しそうである。

「『めんで済んだら枢要院いらなによ。何であんなことしたのさ？』

一步間違えれば事故になつてた

「すみません……」

言葉を変えて再び謝罪する人魚に、春一ははあとため息をついて、頭を搔いた。彼は琉妃香以外の女が苦手である。

「俺も別に怒つてるわけじゃないんだ。素直に話してくれれば、それでいい」

彼なりに声音を優しくして言うと、人魚は春一達を窺い見た。そして、意を決したように口を開いた。

「この海が汚くなつたから……」

「この海が？」

「はい。私は見た通り人魚の妖怪です。私たちの種族は、綺麗な水がないと生きていけません。この海は最初、とても綺麗な海でした。だから私達もここに棲むことを決めました。でも……」

「汚くなつてしまつた」

春一が言葉の続きを代わりに話すと、人魚は再び悲しそうな顔をして目を伏せた。

「そうです。人間達がこの海を荒らすようになつて、私達の住処が段々狭まつていつたんです。あそこに海の家があるでしょ？ あそこの店主は、最近ごみを海に流すようになりました。処理が面倒になつたのかは知れませんが、彼が私達の住処を小さくしているのは確かです。だから、小さな騒ぎを起こして、ここに人を近づけないようにしてやれと……。すみませんでした」

人魚の目から涙がぽろぽろと流れ落ちる。春一は困つたよにまた頭を搔いて、考えあぐねた結果、人差し指でそつと彼女の涙をぬぐつた。

「俺が、協力しよう

その一言に、人魚はぱっと顔を上げて春一を見た。その両目は驚きで開かれている。

「俺が、その店主にもう海を汚くしないように言っておこう

「何で、そこまでしてくれるんですか？ 見ず知らずの妖怪のために

……

「俺は妖万屋の四季春一。見ず知らずの妖怪のために動くのが仕事さ」

そういうと、人魚は笑顔になつて、今度は嬉し涙をぽろぽろと流した。

「おいおい……俺は女の子に泣かれるとどうしたらいいかわからんないんだよ。琉妃香、こういう時はどうすればいいんだ？」

「そのままでいいんだよ。見守つてあげれば」

「ふうん」

困ったように頬をポリポリと搔く春一は、最後に人魚の頭にポンと手を載せて、笑いかけた。

「俺を信じて」

人魚は涙を流しながら、何度も何度も頷いた。

「いらっしゃいま、せー?」

海の家に再び行くと、店主の男が椅子に座つて壁を背もたれにして、煙草をふかしながら新聞を読んでいた。新聞から田を上げると、恐ろしいほどににこやかな春一がいた。その後ろにまたにこやかな丈と琉妃香。

「アンタヤ、仮にもこの店主だろ? 海を汚すようなマネしちゃいけねーわな」

「えつ? 何でそれ知つて……」

ひくついて煙草を落とす店主に、春一は一切の笑みを消し去つて彼に詰め寄つた。壁にバンと手をついて、眉間に皺を寄せた田で店主を睨む。

「お前自身がこの海を汚さないこと。そして、密にもそれを厳しく言つこと。なんにしる、この海をきれいな状態で保つこと。わかつた? それができなきや、俺ら黙つてないからね?」

「ひいっ……わかりました! すみません、もうしませんっ!」

店主は地べたに土下座して、何度も頭を下げた。それを見届けた春一達は、無表情から一変、にこやかになつて店主に背を向けた。そして店からの去り際にアルバイト中の少年の肩に手をポンと置く。

「喜ぶといい。君は頑張つてゐるから、今日から時給百円アップだそうだ」

「えつ、マジすか! ?」

「良かつたな。頑張りはいつしか認められるものだ」

そのあと海の家には、嬉々とした表情の少年と、泣きつ面の店主とが残された。その後、春一達は海を満喫して帰路についた。



「ここ数珠市には、北神大学<sup>ほくしん</sup>と呼ばれる大きな大学がある。市の北側を埋め尽くすほどの広大な敷地面積に、様々な学部学科。日本で一番レベルが高い大学として知られるこの大学は、学生達の憧れの的であつた。よつて北神大学の門をくぐる者も自然と注目を集めるのだが、その理由とは別の理由で周囲の注目を集めている生徒達がいた。

「ジョー、琉妃香、今日一限つて入つてる?」

「俺入つてねーヨ。空き時間」

「あたしもー。ハルは?」

「俺も入つてねーからさ、早めに学食行こうぜ。混む前に食つちまおう」

「さんせー」

「あたし何食べよつかな~」

色とりどりの髪の毛に、あくまでも不良ティリストな服のセンス。目が合つたら確実にすぐに逸らしてしまつよつた外見の三人組。トルンプである。

彼らは高校が全員違つたものの、大学で再び一緒になることができた。大学に入つてからは毎日一緒にいて、こうしてキャンパス内を歩く姿も、後期が始まつた今ではすっかり馴染みのものとなつた。

「んじや俺これから発達心理学の授業だからー」

「おー、じゃあまた次の時間ナ」

「じゃあねー」

三人は一度別れ、春一は発達心理学が行われる教室へと足を向けた。そして、教室に入る前、彼は突然立ち止まつた。  
(妖氣……?)

神経を澄ませると、教室の中から確かに妖気が漂っている。彼は慎重に一步を踏み出して、中に入った。階段教室となっている室内の中ほどに、外見は人間と何も変わらない、一人の少年がいた。

控えめな茶髪に、眞面目そうな顔つき。服装も至って普通の大学生で、清楚だ。春一の対極にいるような、そんな少年だった。

「よひ」

春一はそんな少年の隣に腰掛けて、彼に話しかけた。妖怪の少年は突然話しかけられたことに驚いたようだが、春一の顔を見るとすぐに笑顔になつた。

「ああ、春一さんですよね？ 妖万屋の」

妖万屋、というワードを小声で言つて、少年は春一に会釈した。今度は春一が少し驚いた。自分のことを既に知っているとは。

「俺のこと知つてんの？」

「僕、丹羽詞なんです。僕らの種族が前に人間と揉め事を起こしたときに助けてくれましたよね」

「ああ、あの治癒力が高い種族の。確かに前に面倒見たっけ」

「僕は凜です。よろしく

「改めまして、春一つす。よろしく、ハルでいいよ」

二人は握手を交わした。そこで、春一の頭に疑問がよぎる。

「あれ？ 前期にいたっけ？」

「僕、転入してきたんです。だから前期はいなかつた」

「だよね、見てないもん。学科は何？」

「心理。ハル君は？」

「俺も心理なんだ。一緒だな」

「そつか。ハル君がいてくれてよかつたよ。心強い」

「まあ、俺でも少しあは役に立てるよ。例えば、数ある食堂でも一号館のが一番うまい、とかの情報提供とかね」

「そなんだ。今日行ってみるよ」

「限空いてる？俺、行くんだけど一緒にどう？」

「ありがとう」



春一と凜は、それぞれ授業が終わってた丈、琉妃香と落ち合った。春一はそこで凜を一人に紹介して、一緒に食堂まで行つた。

「ここのおムライスはお勧めだよ」

「へえ。じゃあ、オムライスにしようかな」

琉妃香の勧めに応じて、凜は早速食券を買い求めた。春一達もそれぞれ好きなものの食券を買う。中に入つてテーブルにつき、食事が到着するのを待つ。

「凜は何で転入してきたんだ？」

水を飲みながら、春一が凜に尋ねる。丈と琉妃香も興味津々に転人生を見ている。凜はちょっと困ったように笑つて、「引っ越ししたんだ」と答えた。

「ふうん。どうせなら最初つから来ればよかったのに」

「急に決まったことだったから」

その後、運ばれてきた料理を食べ、食事を済ませた四人は、また授業へと散つて行つた。

「なあ、凜。わかってるよな？」

「大学変えたくらいで俺らから逃げれると思つてんなよ？」

「はい、一択。煙草押し付けられるのと、金出すの、どっちがいい？」

夕方から夜へと変わつた、そんな時間。北神大学近郊の公園では、凜が三人の男に囲まれていた。その内一人には目前に煙草を構えられていた。

「今日は、お金、持つてないんだ」

凜が恐る恐る言つと、男達は舌打ちをして、煙草を吸つていた男

が迷わず凛の顔に煙草を押し付けた。凛の悲鳴が公園内に木霊する。「何でかしんねーけど、お前はすぐ治つかけつからな。」いつはやりたい放題だぜ

「はい、もっかい一択。殴られたのと金出すの、どちらがいい?」

凛は溢れだす涙をぬぐうことすらできずに、胸倉を掴まれた。ふるふると首を振ると、容赦ない拳が彼の頬を打ち据えた。

「ダメだ、コイツ今日は金持つてねーよ

「んじゃ適当に痛めつけて終わりにするか」

男はペッと煙草を吐き捨てる、倒れた凛の腹に蹴りを打ち込んだ。それを皮切りに、何重もの蹴りが凛の体にめり込んだ。凛は男達が去った後も、公園で蹲り、ただ涙を流した。

次の日は、数学系の一般教養科目で凛と春一達が全員一緒にになった。一限目の授業で、始業まではあと二十分強ある。凛は笑顔で二人と再会した。

「よう、凛」

春一が大あぐびをしながら凛の横に座る。丈と琉妃香は一段下の席に座つて、凛に朝の挨拶をした。

「おはよう」

「凛、何かあつたのか？」

「え？」

春一の突然の問いに、凛は一瞬きょとんとした。意味が分からず呆けていると、春一がポリポリと頭を搔いて溜息を吐き出した。  
「まあ会つて一日の奴に言いたくはねーかもしんねーけど、何かあつたなら言えよ？」

「う、うん……」

自分が問題を抱えていることは、春一にはお見通しだつたらしい。しかし凛は友人になつたばかりの春一達に迷惑をかけることもできず、歯切れの悪い返事をして黙つた。

「もし、ダチに迷惑かけるのが悪いって思つてんなら、そいつは考え過ぎつてやつだぜ。迷惑かけるからこそ、ダチつて言えるんだろうが」

またも見透かされていた。凛は遂に何も言えなくなつて、ただ俯いた。

「まあ、そんなに重く考えんなよ。もしダチだからってことで萎縮してんなら、俺に依頼をすればいい」

「依頼？」

「俺は妖万屋だぜ？ 妖からの依頼を遂行するのが仕事だ」

「あ……」

そう言わると納得してしまつ。凛は心の中で葛藤をしつつも、このことはいつまでも自分一人で抱え込むわけにもいかないと思い、事情を春一達に話すこととした。

「前の大学で一緒だった人達なんだけど……」

「成程ねえ。そいつはちょっとばかし可愛げがねえ遊びだな」

「大学を変えたのも、それが理由なんだ。ここまで追つてくるとは思わなくて……」

「そつか。よし、依頼は引き受けた。そいつらを黙らせればいいんだな？」

「で、でも、怖い人達だから、危ないよ？」

「修羅場なら潜り慣れてるんだよ」

二力ツと自信満々で笑う春一に、凛は安心感を覚えて笑顔で頷き返した。

その日の帰り道、凛は春一達とは別方向のため、一人で歩いていた。すると、後ろからバイクの爆音が近づいてきた。まさかと思い振り返ると、凛の願いもむなしく、昨日も来た三人組だった。

「凛ちやーん、ちょっとツラ貸して？」

言われるままに昨日と同じ公園に連れて行かれ、恐怖に身を縮まらせていたら、肩をドンと押されてフェンスに叩きつけられた。「で、金は用意したんだよな？」

「昨日はなかつたけど、今日はあるんだよねー？」

「俺らもそんな氣い長い方じやねえから、そろそろ出しどいた方がいいよ？」

にやにやしながらにじり寄つてくる三人に、凛はカタカタと肩を震わせながら、喉の奥から声を絞り出した。

「きょ、今日もないよ……」

「ああ！？」

一人がガシャン、とフェンスを蹴つて脅すと、もう一人が凛の胸倉を掴んで立たせた。そして思い切り殴る。

再びフェンスに叩きつけられた凛は、ぽろぽろと涙を流しながら、頬の痛みと口の中に広がる鉄の味に必死に耐えていた。

「凛、いい加減にしろよー！」

「いやー、あのゼファーとケツチシブいねー」

「「「「……。！？」」」

突然全く違う声が介入してきた。しかし、三人組の後ろから現れた当の人物はいい天気でも眺めるようにバイクを遠巻きに眺める。

「で、お前らだな、俺らのダチを恐喝してるのは。あのねー、

いい年こいてやることが狡い。大学生なら自分で働いて稼ぎなさい。  
お母さん泣いてるよ？」

「何だお前！」

「だから凛のダチだつて。わざと言つたじやん。質問のレベルが低  
次すぎる」

「ああっ！？」

「人が春一の胸倉を掴む。そのまま殴らんばかりの勢いだ。  
「あのさ、服伸びるから離してくれる？」

「ふざけんなっ！」

春一を殴ろうと腕を引いた瞬間、横から春一の左手がフックのよ  
うにやつてきて、そのまま頭を掴み、その勢いで頭を地面に叩きつ  
けた。

「がつ……」

「離してつて、言つたよね？」

春一の冷たい台詞がその場の空気を凍らせる。凛も、残りの二人  
も固まっている。

「どうする、凛？俺がその気になれば、残りの一人も片付けるけ  
ど、やつちやおつか？」

「ああ？」

「ちょっと黙つてろよ。俺今凛と話してんだろ」

「なつ、テメツ」

春一に手で制され、口では突つかかるものの、いざ行動に出そう  
とすると地に沈んだ仲間を見てしまつ。目の前の男は確実に自分た  
ちよりも強い。

「何ならお前がこいつら殴つてもいいんだぜ？今までの仕返しして

やれよ」

「え……」

「お前が遭つてきた田をこいつらに味わわせてやるんだ」

凛はその言葉に衝撃を受けた。自分が遭ってきた日を逆に味わわせる。そんなことは考えていなかつた。だが、今ならそれが可能だ。

春一がいる。ならば

「で、でもね、ハル君。僕、やっぱりそういうのはいけないと思うんだ。ハル君の言つことが正しいのかもしれない。けど、僕の信条とは違う。僕は、闇雲に人を殴りたくない」

凛が春一の顔を窺いながらゆっくり言つた。言い終わると、春一の顔を下から覗き込んだ。もしかしたら怒つてゐるかもしれない。

「よく言つた！」

しかし、春一は凛の予想とは全く違つて、明るく笑つていた。

「ゴメン、ちょっと試した。それでこそ凛だ。やつぱりさうでなくちや

凛とがしつと肩を組んで、春一は笑いかけた。一人でうんうんと頷いている。

「さて、お前ら、凛は見逃してくれるそつだぜ？あ、そこで寝てる人は凛を殴つた罰ということだ」

「何さらつと締めようとしてんだテメエッ！」

「あれ？ダメ？」

しつと言つ春一に、残りの二人はぐつと詰まりつつも、このまま引き下がれない思いの方が勝り、春一達の前にずいっと詰め寄つた。

「このまま黙つてる俺達じゃねえんだよ

「お前ら、タダじゃ帰さねえ

「うおー、このゼファーとケツチシブいナ！」

「本当だ！ケツチはタンクに傷入つてゐるけどね

「「...?」」

再び突然に知らない声が介入してきた。一人がそつと振り返ると、そこには黒いメッシュを入れた不良と、金髪の美少女がいた。そして、目の前の銀メッシュ。

「ま、まさか……トランプッ！？」

「俺のこと知ってんだ？」

「もう伝説みたいなとこあるけどヨー」

「あたしがクイーンだよー」

不敵な笑みを浮かべる春一とは裏腹に、二人組はさ一つと血の気が引くのを感じた。自分は、とてもない人達に喧嘩を売つてしまつたらしい。

「す、すみません、トランプだとは知らずに……」

「許してくださいっ」

「凛、どうするよ？俺らはお前の決定次第で動くぜ」

「……もひ、一度とこんなことはしない？僕含め、他の人たちにもだ」

「しない、悪かったよ！」

「……なら、いいよ。許すまでにはまだ時間がかかるかもしれないけど、とにかく、今は行つていいよ」

凛の言葉を聞くと、二人は寝ているもう一人を起こして、バイクに跨つて帰つて行つた。

「ハル君、ジョー君、琉妃香ちゃん、ありがとう。おかげで助かつたよ」

「当たり前だろ？気にすんなつて」

「そーそー、ダチだしヨ？」

「友達が困つてゐる時は、助けるのが本当のダチつてやつだよー」

その言葉が嬉しくて、凛は不意に涙をこぼしそうになつたが、今は泣く時ではなく笑う時だと思い直し、最高の笑顔を見せた。

四人はそのまま四季家へとやつてきた。公園から近かつたことと、凛の傷の手当をするためだ。

「夏、手当してやつて。俺は救急箱の場所すら知らないから」

「階段の収納スペースに置いてあると前も言つたでしょう」

「うるわいな。いいから手当して。早く」

「はい」

はあと溜息を吐き出して、救急箱を持つてくる。中から必要なものを持って、凛の手当に取り掛かる。凛は若干の呻き声を発しつつも、我慢して手当を受けている。

「しかし、あなたたちはどれだけ有名な不良なんですか」

「不良じやねーって」

「どこがですか」

「ナツちゃん、不良扱いは勘弁だぜ?俺らのどこがふりょーなんだつてノ」

「そーだよ夏兄、ひどい」

「そんなに非難されても……」

「俺らだって好きにこいつなつたわけじやねーっての」

「そうそう」

「じゃあ何故こんなこと?」?

「そりゃあ……どつから話せばいいんだ?」

「ガキの頃か?」?

三人で話し合つた結果、三人が幼少期の頃から話すことになつたらしい。夏輝と凛が待つていると、春一が腕を組んで話し始めた。トランプの結成について。



時は十二年前に遡る。春一達が小学校に入学した時代。髪もまだ全員黒く、ピアスも開いていなかつた時。

三人は入学してクラスが一緒になると、すぐ仲良くなつた。小学校一年生の頃はクラスメート全員が友達のようなものだが、この三人は特に仲が良かつた。元々性格が似ているということもあり、学校にいる間も終わつても、三人は毎日一緒に遊んだ。

そうして一学期が過ぎ、二学期に入った時、事件は起きた。

春一と丈は、毎朝一緒に登校していた。琉妃香だけ家が別方向なので、登校だけは分かれていた。大方春一と丈のどちらかが寝坊をするので、いつも琉妃香が教室で一人を待つていた。そして今日も、春一の寝坊のせいで遅れて教室にやつてきた二人は、異変に気付いた。

いつもいるはずの席に、琉妃香がいないのだ。赤いランドセルはあるのに、琉妃香本人がいない。彼女は今日直ではないはずだし、どこかへ行くなら他のクラスメートに言伝を頼むはずだ。

「ねえ、琉妃香知らねえ？」

春一が近くにいたクラスメートの男子に尋ねると、その子は困つたように目を逸らした。何かを知つている表情だ。

「おい、琉妃香どこだヨ？」

丈が肩を掴んで揺さぶると、男の子は泣きそうな顔になつて口を開いた。

「三年生に連れていかれたんだよ！五人くらいで来て、琉妃香ちゃん連れて行つちゃつた」

その言葉を聞いて、春一と丈の目が見開かれる。丈も相手を搖するのをやめ、放心状態で固まる。

「……どこ行つた？おい、どこ行つたんだ！？」

春一が声を荒らげて聞くと、男の子は震える声で「プールの方」と言った。春一と丈はそれを聞くや否や、すぐに駆け出した。

一年生の教室がある校舎の東側には、プールがある。プールはちょうど棟と棟の間にがあるので、他の場所からは見えにくく、影になつていて。

二人がプールの方に駆けつけると、柵に追い詰められた琉妃香と、それを取り囲む五人の三年生がいた。琉妃香は泣きそうになつて、目に溜まつた涙が震えている。

「何してんだあつ！」

春一と丈が同時に叫ぶ。その声に琉妃香と三年生たちが一斉に一人を見る。

「琉妃香に何してんだ、テメエラ！」

丈が叫ぶと、三年生の中でも特に体の大きいリーダーが一步前に出てきた。

「コイツが生意気だから話聞いてんだよ！弱いくせに薙刀なんてやつて、調子乗つてるからな！あの木刀がないと何もできないくせに」琉妃香は幼稚園の頃から薙刀を始めていた。その才能は早くから開花し、年上の相手でも琉妃香には敵わないほどだった。またスポーツも万能で、男子にも引けを取らないその運動神経と、小学校一年生とは思えない美貌で多くの生徒から憧れの目で見られていた。七歳という年でも、彼女に好意を持つ生徒は少なくなかつた。

しかし、それは同時に妬みも生み出した。自分にはないものを持つている他人を、人は時に羨み、時に妬む。常に一番でありたいという子供らしい欲求を持つ一部の生徒にとって、琉妃香は妬みの対象だつた。

三年生の内の一人が琉妃香の髪を引っ張ろうとするので、春一はその腕を掴んで止めた。この一人もスポーツをやらせたら万能だ。

力だつてそこら辺の上級生には負けない。

「お前ら、一年生が三年生に勝てると思つてんのか！」

「そうだ、こつちは五人もいるんだぞ！」

「だから何だよ……？」

春一がとても一年生とは思えない凄みを利かせて三年生の前に立ちはだかる。

「このつ……！」

春一に腕を掴まれていた三年生が、春一の腕を叩いた。春一は手を離し、その手を握り固めてその三年生の顔面を思い切り殴つた。

「やつたな！」

それに他の三年生が一人に殴りかかった。やはり相手は上級生だけあつて、強い。殴る拳は痛いが、手を休めたらこちらが殴られる。春一と丈はぼろぼろになりながら、この喧嘩に勝利した。やられた三年生はめいめいに泣いて逃げ出し、後には三人が残された。

「あー……いつてー」

「ちくしょー思い切り殴りやがつテ」

顔を「じご」と乱暴に手で拭つて、それでまた痛くなつて顔を顰める。だが、二人は琉妃香に笑顔を見せた。

「琉妃香、大丈夫か？」

「何もされなかつた力？」

一人の笑顔がとても痛々しくて、琉妃香は大声を上げて泣いた。春一と丈は最初、初めて見る琉妃香の涙に呆けていたが、すぐに自分たちが泣かせてしまつたと思つて慌てふためいた。

「あー、琉妃香！」

「悪かつたヨ、泣くなんて思つてなかつたかラ……」

おろおろするばかりの一人に、琉妃香はしゃくりあげながら首をぶんぶんと振つた。

「ちが……違うの。あたしのために……ごめ、ごめんね、ハル、ジヨー」

その言葉を聞くと、おろおろとしていた一人の態度が一変。一人

は太陽のように一カツと笑つた。

「そんなの、何も悪かねーヨ」

「そうそう、こんなん痛くも痒くもねーし」

「お前さつき痛いって言つてただ口！」

「そ……そんなん忘れたよ！」

ギヤー・ギヤーと騒ぐ二人に、琉妃香は自然と笑顔になつた。それが嬉しくて、一人は言い合いを忘れて笑つた。三人はひとしきり笑つて、教室に戻つた。

程なくして、三人は職員室に呼ばれ、春一と丈はこつぴどく叱られた。しかし琉妃香が庇つたため、時間はそれほど長くならなかつた。

それからだ。琉妃香が薙刀だけでなく護身術や居合も覚え、二人を負かすまでになつたのは。

彼らは琉妃香の涙をあれ以来一度も見ていない。腕っぷしもだが、心も強い女性なのだと二人は信じている。その信頼こそが、琉妃香の心を強くする一番の要因なのだ。それは一人には言つていないが、言う必要もない。三人それぞれが皆同じことを思つてゐることは、見えないことだが火を見るより明らかだからだ。

今日は土曜日。日曜日に向け、夜更かしでも飲み明かしでも何でもできる曜日である。大学が休みの春一は、家で課題と向き合っていた。時折辞書を使いながら、英語とにらめっこをしている。

店を閉めた夏輝がダイニングに上ると、春一がシャーペンで頭をこつこつと叩きながらパソコンを立ち上げていた。

「少し休憩したらどうですか？すぐ夕飯を作ります」

「おう、そうするか。今日のメニューは？」

「ラザニアです」

「いいね」

春一は机の上を片付けて、ソファへと移った。テレビを見ながら夕飯が出来上がるのを待つ。今は時間的にどのチャンネルも夕方のニュースを伝えており、春一は適当に局を選んでそれをぼうっと眺めた。

『続いて、県内ニュースです。昨日の深夜、数珠市の山で自動車の事故が発生しました。車はガードレールを突き破り谷底に落下。運転をしていた山路透さん、二十一歳が重傷を負いました。この山での事故は今月に入りすでに八件目ということで、県警では注意を呼びかけています』

（事故か……。今月が始まつてまだ半分……。それで八件は多すぎる。何か事件が絡んでるのか？）

春一は若干眉間に皺を寄せたが、自分の考え過ぎだと頭を振った。

「どうかしたんですか？」

スープを運んでいた夏輝が春一に声をかけた。

「ん、ああ。県内で事故が続発してるので、運転するときは気をつけねえとなって思つてわ」

「ああ、数珠峠で発生している連続事故ですよね？前を走るシリビアに勝負を仕掛けられて、それに乗つてしまつと事故をしてしまつていいづ……」

「そうなのか？」

「ネットに載つていましたよ。最近巷を騒がせているので、情報もそれなりに多くあります。尤も、信憑性には欠けますが」

「ふうん……」

春一は顎に手を当てて考えていたが、その考えはチャイムの音で消された。すぐに夏輝が玄関へと出でていく。すると、少しして傷だらけの男を連れてやつてきた。

「ハル、事故の被害者の方です。妖のことで相談があると」

「……話を聞こいづ」

夕飯は後回しになってしまった。今数珠市で頻発している、峠での自動車事故。その被害者である男性が四季文房具店を訪れたからだ。

「もう閉店してゐるのに上り込んで、すんません」

やつてきた彼は、二十代前半くらいで体のいたるとこに傷を作り、包帯を巻いている。見るからに痛々しい風貌の男は、時間外に来てしまつたことを詫びてから、勧められた椅子に腰を下ろした。夏輝がすぐにコーヒーを差し出すと、彼は一礼してそれを飲んだ。

「えと、君は……？」

男が春一のことを見て問い合わせる。夏輝はすぐに誓約書を取り出して、彼の前に置いた。誓約書の内容は、第一に「どんな人間が事件を調査しても文句を言わないこと」と若干不吉な文章が書かれ、その下には、依頼人は調査に協力をするようとの事務的な事柄が何項かに渡つて書かれていた。

「一筆いただけますでしょうか？」

夏輝がモンブランのボールペンを差し出すと、彼は戸惑いながらもそれにサインした。それを見届けた春一が、一つ咳払いをして姿勢を正す。

「店主の四季春一です。よろしくお願ひします」

男は一瞬固まつた。何を言われているのかわからない様子だ。そんな彼のことなどまるで無視した春一が、誓約書を読み上げてサインの欄を見る。

「良さんね。改めましてこんばんは。よつじ四季文房具店へ」

「君が……店主？」

「ええ。文房具店の店主はそこにいる夏ですが、妖万屋においての

店主は僕です。夏は助手」

「まだに信じられないという風にいぢりない良を、春一は例の如く無視して依頼の内容へと移つた。

「それで、『依頼は？今回の連続事故絡みといつのことですが』

「は、はい……」

良はやつと頷いて、その口を開いた。

「俺は、走り屋チーム『Noisy Road』のもんなんだけど、最近俺らが使つてる峰で事故が起つてるんです。ニュースとかでもやつてるかもしないんですけど……」

「ニュースで見ました。詳しくお聞かせ願えますか？」

「はい。俺のチーム内でも五人が被害に遭つてます。前を走る白いシリビアが勝負を吹つかけてくるんです。そんで、それに乗つて走つてると……突然、そいつが消えるんです！前を走つてのはずのシリビアが急に消えて、そいやつてパニクつての内に事故して……。本当、みんな妖怪か幽霊の仕業じゃないかって言つて……。この件、お願ひできますか？」

「お引き受けしましょう」

春一の自信満々な笑みが、不安でたまらない良を安心させた。

夏輝はその夜、山道を車で走っていた。例の事件の調査をするため、一番新しい事故の現場へと向かっている最中だった。

すると、彼が運転する車の前に、一台の白い車が現れた。  
(幸か不幸か、出会ってしまうとは……)

夏輝は車に明るくはないが、目の前の車が例の車だということはわかる。最大限の注意を払いながら、後ろについて走る。

(あれは……！)

前を走るシルビアが、窓から手を出して挑発してくる。バトルを仕掛けているのだ。

夏輝は迷った。ここで勝負に載つて妖を試すべきか、安全を第一に考え乗らないべきか。少しの間考えた結果、このまま様子を見てみようという結論に達した。勝負には乗らず、このまま後ろを走つてみる。妖の出方を窺う。

しばらく走ると、シルビアは再度挑発をしてきた。夏輝はそれに乗らず、追従を続けた。山は下りに入り、そろそろ事故現場だ。夏輝は事故現場まで行つたら車を路肩に停めようと考えていた。その刹那、彼の前から、シルビアが消えた。車のライトが照らすのは、夜の闇だけだ。

そこで夏輝は異変に気が付いた。確かに今は夜だ。視界は悪い。だが、見えなさすぎる。黒いマジックで塗りつぶしたような、違和感のある黒い闇が目の前に広がっている。

これは変だと理論でなく直感で気付いた夏輝は、すぐに車を左へ寄せて停車しようとした。しかし、遅すぎた。

闇の後に突如現れたのは、白いガードレール。

「しま……っ！」

急ハンドルを切り、ブレーキを思いっぱい踏み込む。しかし車はもちろんすぐには止まらず、そのままガードレールに衝突した。その衝撃で、夏輝の意識は途切れかかった。しかし彼は力を振り絞り、何とか顔を上げた。すると、黒い闇の中を白いシルビアが走っていく光景が見えた。さつきまでとは違い、周囲も薄暗くはあるが、見えていた。夏輝はそれを確認すると、静かにまどろむ意識の中へと落ちて行つた。

春一が病院から知らせを受けて飛んでいくと、ベッドには傷だらけの夏輝が寝ていた。まだ意識は戻らないらしい。

春一はベッドの脇にヘルメットを置いて、椅子に腰かけた。ギシ、と椅子が軋む音やけにうるさく聞こえる。

しばらく座つていると、部屋のドアがノックされ、医師と看護師が入ってきた。春一は立つて会釈して、医師の言葉を待つた。

「同居人の方ですか？」

「はい」

医師は頷いて、傷の具合を話し始めた。

「内臓や脳に損傷はありませんが、打撲がひどく、肋骨と鎖骨を骨折しています。意識はもう少しで戻るでしょう」

「そうですか。ありがとうございます」

春一が頭を下げるとき、医師は軽く頭を下げて部屋から出て行つた。それからしばらくすると、夏輝が軽い呻き声を上げた。春一はすぐ立ち上がりベッドのそばに寄つた。

「ハ……ル」

「夏、大丈夫か？」

「はい……。すみません、車を壊してしまいました……」

「お前な、こんな時になんだけど、殴るぞ? んなことどうだつていつての。……無事で良かつた……！」

心から安堵の表情を浮かべる春一に、夏輝は「すみません」という言葉を発しかけて飲み込んだ。

「ハル、今回の事件ですが……」

「事件のことは忘れる。今のお前は妖万屋である前に患者なんだか

「いえ、言わせてください。私はハルの助手ですから」

「お前つてそういう所頑固だよねー」

春一はため息をついて、頭をぼりぼりと搔いた。少し躊躇つた後、

「聞こう」と言った。

夏輝は自分が見たものの全てを春一に話した。妖怪の乗る白いシリビア、そしてそれが不自然なほど暗い闇に消えたこと、事故をした後に走り去るシリビアを見たこと、一つの情報も漏らさず、詳細を伝えた。

「わかった。お前の調査結果は無駄にしねえ。後は俺に任せて、療養しろ」

「はい、ありがとうございます」

春一は頷いて、ヘルメットを手にした。

「また来るよ、じゃあな」

それだけ言って、彼は部屋を出た。

「久しぶり、由良さん」

「お一つ、ハル坊、元気してた？」

「元氣つすよ。由良さんは？店繁盛してますか？」

「おかげさまでね」

春一がやつてきたのは、一件の中古車ショップ。中古車販売から車の修理・整備まで行っているその販売店で、春一と彼よりも十歳ほど年上と見られる女性が話している。

由良と呼ばれたその女性は、長い髪を後ろに流し、前髪は赤く染めていた。スタイリッシュなスーツに身を包み、大人の雰囲気を醸し出している。彼女はこの中古車ショップの代表取締役であり、そして春一の知り合いでもあった。

「どうしたの、ハル坊？パーツでも見に来た？」

「いやそれが、事故で車オシャカになっちゃって……」

「事故！？大丈夫なの？」

「事故ったのは俺じゃないから、俺は大丈夫なんだけどね。車が全損イッちまつたから、ちょっと見してもらおうと思って」

「そつか。そういうことならゆっくり見てって。ハル坊なら安くしてくれよ」

「ありがと」

春一は由良と一緒に車を見て回った。メーカーは問わず、たくさんの車種がある。プレジデントやキヤデラック、GTR、FD、インプレッサ、レガシー、ハコスカ、コルベット……普通の乗用車はないが、VIPカーやアメ車、旧車まで、様々な車が取り揃えられている。

「何にしようかな？」

春一はウキウキとした表情で、店の隅々まで車を見て回った。そして、一つの倉庫の前で立ち止まつた。倉庫はシャッターが半開きになつており、そこから一台の車が顔をのぞかせていた。

「まだ、大事に取つてあるんだね、このFC」

春一の顔に、ふつと悲しみの影が落ちる。倉庫に入つている真っ白なFC。今にも動き出しそうで、良く手入れされている。

「捨てられないよ……この車は」

「もう、四年も経つんだね。あれから」

「四年……か。そうだね。あの時はハル坊もジヨーも琉妃香もまだ中学生で……」

由良が言葉に詰まる。込み上げる涙を必死に堪えて顔を上げる。「思い出させてゴメン」

「いいの。それに、思い出は思い出さないとなくなっちゃつから」

由良の無理な笑顔に春一は目を伏せて、FCを見た。

(秋志……何で、由良さん残して逝つちまつたんだよ?)

中学三年生になるまでに、春一、丈、琉妃香の三人は数々の喧嘩を買つてきた。それは彼らを「不良」と位置付けるには十分であり、世間が彼らに冷たく接する理由としては領けるものだつた。今まで友達だつた者の目は冷たく、態度は余所余所しくなつた。

しかしそれは、必然的に三人が結束するという結果になつた。それぞれがそれぞれの拠り所に。いつの間にか三人だけでいるのが普通になつていった。

学校はいつしか行かなくなり、昼夜三人で行動するのが当たり前になつた。

だが、彼らは決して自ら喧嘩を売つたことはない。こちら側から手を出すことなどいくらでもあるが、彼らが喧嘩をする時と言えば、相手が誰かを虐げている時や、向こうが三人の内の誰かに手を出そうとした時だけだ。喧嘩を売られても基本的には相手をしなかつたが、相手が誰かに手を出そうとすると（特に琉妃香）糸がいとも簡単に切れるため、すぐ喧嘩に発展した。

煙草も酒もやらなかつた。元々、「トランプ」なんて名前を付けられるのも不本意だつた。有名になればなるほど、敵は増えた。そのたびに誤解は増えた。

警察の厄介になることも珍しくはなかつた……どじろか、むしろ常連だつた。年も増すごとにそれは多くなり、本格味を帯びてきた。警察に連れて行かれそうになると、春一と丈はまず琉妃香を逃がした。琉妃香は常々不平を言つていた。自分だけ助かるのは不公平だと。しかし、二人は頑として聞き入れなかつた。琉妃香は絶対捕まらせたくない。それが一人の願いで、琉妃香は一人が一度決めたことを譲らないということを知つていて、何度講義しても無駄だ

つた。故に、トランプが三人組だということを知っている人間は少ない。彼らと直接会つていなければ知らないだろう。

「またお前らか！」

「うつせーな、こっちだつて来たかねーよ！ テメーらが連れてくんだろが！」

「そーだヨ！ 来てほしくなかつたら連れてくんのやめりやいいじゃねー力！」

警察署の少年課で、椅子にふんぞり返つて座り、文句を垂れる二人に刑事は机をドンと叩いた。

「オメーら静かにしやがれ！」

「じゃあまずテメーが静かにしろよ！」

「黙らせてやん力！」

「んだと！」

いつものやり取りが続いたある日。いつもとは違う光景がそこに介入してきた。

「おうおう、威勢のいい奴らだな。聞くまでもなく元気だな」

「誰だテメー！」

「俺らに何の用だヨ！」

「ちつたあ落ち着けよ……。俺は秋志。少年課の刑事よ」

それが、初めての出会いだった。

秋志と名乗ったのは、二十代後半くらいだろうか、若者だった。短く立つた黒髪に、黒く丸いサングラス。背は高く、百八センチに届こうかという長身だ。快活で、笑い顔がよく似合つ。尤も、目は隠れているのだが。

「んだよ、俺ら年少送りにしようつて氣か！」

「上等だ、してみろヨー！」

「んな氣はねえよ。とりあえず落ち着けってんだろ。俺は知つてんだぜ？お前らのことよ」

「俺らの何知つてんだヨー！初めて会つたくせにヨー！」

「ホラ吹きかテメー！」

秋志はやれやれと溜息をついて肩を落とした。幅の広い肩が垂れ下がる。

「お前らは本当に悪いことはしちゃいねーんだよな。お前らが喧嘩を吹つかける時は決まって誰かを助けるためだ。正義のヒーローって言えば聞こえはいいか？」

「一人の田が点になる。それはそうだ。今まで否定しかされてこなかつた自分達の行動が、初めて理解された。

「お前ら根はいい奴なんだよな。お前らの仲間、もう一人いんだろ？美人な女の子」

「琉妃香に何しよーつて氣だ！」

「手え出したらタダじやおかねえゾ！」  
「だーかーらー」

秋志は面倒くさそうに一語一語を伸ばして一人に顔を近づけた。

「再三言つて、落ち着け。お前らどんだけ血の氣多いのよ？お前らのお姫様に手は出さん。何もしてない

それだけ聞いて、一人の怒り肩が少し落ち着く。

「お前らの仲間の女の子も同じだ。本当に悪いことはしていない。更にお前らはその子を絶対に逃がしてる。まあ、女の子の方はしていることも少ないので、お前らに比べれば大分マシだけどな。随分オット」「前じゃん？」

「オイ」

椅子にどっかりと座つて足を組む秋志に、春一が立ち上がりてズイと威圧した。周りの刑事達は臨戦態勢に入っている。

「俺らおちょくつて何が楽しいんよ？ そんなに喧嘩買つてほしいんなら、買つてやんぜ！」

血管を浮き上がらせる春一に対し、秋志は立つて彼を見下ろした。

春一の肩をドンと押し、無理やり座らせた。

「これが最後だ。落ち着け。俺はお前らのことをおちょくつてるわけじゃない。認めてんだ」

再び立ち上がるとした春一の動きが止まる。隣で丈も止まつている。自分達のしたことが認められるなど、初めての経験だった。

「けどな、お前らのすることはあんまり褒められるものでもねえ。確かに間違つちゃいねえが、正解でもねえ。その力、もつと違うとこに使え」

二人は打ちひしがれた。今まで彼らを相手にしてきた刑事達はみな口々に怒鳴りつけ、同じことを言つた。彼らはそれに反発し、時に殴り掛かった。だが、秋志には声静かに諭され、それに心を挫かれた。

間違つてはいない。だが、正解でもない。

「女の子にもさつき会つてきたよ。だから遅れたんだが……。あの子もお前らと一緒に根はいい子だつた。んでもつて、お前らと一緒に殴り掛かってきた。『ハルとジョーに何かしたのか』ってな。お前ら三人、似た者同士だ」

そこで秋志はサングラスの奥の目を覗かせ、笑つた。

「お前らの結束力がありや、きっと俺らみたいな警察には屈しない

だろう。これからずつとこんなことを繰り返すこともできるだろう。

……けどな、俺はそれと同じくらい、お前らがまつとうに生きていける可能性があると思う。そんでもって俺は、そっちの方が楽しいだろうとも思う。監獄に入つて三人別々になるよりは、青空の下で一緒になつてた方が断然いい。そう思わないか？」

春一と丈は黙つた。こんなの、自分達を抑えるために適当を言つてゐるに決まつてゐる。そうやつてわかつたフリをして、結局は信じていない。扉の外に出れば、「あんな奴ら社会のゴミだ」と言つに決まつてゐる。

だが、二人は歯を噛みしめるだけで、それを言動に出すことができなかつた。いつもなら殴り掛かる乃至、声を荒らげてゐるなりしているはずだ。なのに、今回はそれができなかつた。何故かはわからない。秋志という人間が持つ雰囲気。そうとしか言えなかつた。

「ハツハツハ！」

いきなり秋志が笑つた。二人は何事かと、彼を見上げた。

「お前らおもしれーよ！まるで女の子と同じ反応するんだもんなあ。お前ら三人の結束力、実はちょっとだけみくびつてた。悪かつた。……正直言うとな、お前らがこのままブタ箱ぶち込まれようが、俺には関係ねえ。だがその絆、大事にしろよ。他の人間にはなかなかそんな強い絆は作れねえ。お前らは、一生かかつても作れねえもんを、もう持つてるんだ。それは誇れ」

今度は、歯の食いしばりもなくなつた。筋肉が緩み、呆気にとられる。彼らは、今まで当たり前すぎて気づいていなかつた絆の強さを、しかと感じだ。それは、多大なる安心感を与えてくれるものだと、今になつて気付いた。

「お前ら、もう帰つていいぞ。俺昨日からここに赴任してきて、やらなきゃいけないことが山積みなの。お前らの相手なんとしている暇ないから」

早く帰れと手を振る秋志に、一人はもう何も言えなくなつた。襟首を掴まれて無理に立たされ、背中を手の平で押された。一人はど

ひともなく歩を出しつゝ置を後にしてた。

それからしばらくの間、三人は行動を落ち着けた。秋志といた時間はほんの僅か。言われたこともほんの僅か。それでも、何か浸透するものが、三人にはあった。それはじわじわと、しかし確実に三人の心に染み込んできた。

「何だつたんだあの刑事」

「意味わかんなかったナ」

「ホント」

毎度おなじみとなつてゐる三人のたまり場、丈の車庫で、三人はまた今日も暇をつぶしていた。

「散歩でも行つてみつか?なんか、じつとしてんのは性に合わねー」

「だナ。琉妃香も行くか?」

「そういうの愚問つて言うんだぜー」

「コイツ、難しい言葉覚えやがつたナ。俺ら出し抜こーつて氣力!」

「バーカ。お前らなんてとつくに出し抜いてんだよ」

「チクショー、あの可愛い琉妃香はどう行つたんだ?」

「どのあたしだよ!つづーか今は可愛くねーつてか!」

「冗談だよ」

「知つてんよ」

三人はとりあえず人気のない道を歩いた。散歩をするなら静かな方がいい。そのまま公園に来ると、駐車場に目を引く車が一台あつた。真っ白なFCだ。

「おーFCじやん。俺免許取つたらあれ乗りてーんだよ」

「FCかつこいいよナ。俺FD派だけド」

「えー、そこはやっぱGTRじゃない?」

そんな話をしていたら、そのFCから人が降りてきた。三人はその顔に見覚えがあった。この間警察署で見た、秋志だ。

秋志は車を降りると、走って公園の中へと入つて行つた。三人は顔を見合させて額き合い、秋志の後を追つた。

三人が秋志を見つけた時、彼は一人の男と対峙していた。すると、三人の皮膚を何かがびりびりと刺激した。あれは普通の人間ではない。何か、言葉では言い知れぬものが感じ取れる。それは三人ともが感じているようで、誰ともなく目を合わせてその異様な存在を確認し合つた。

「お前かあ、近頃盗み働いてるつて奴は。話し合ひ氣は……ねーな。来いよ、デカブツ」

秋志が挑発的に言うと、対峙している男が秋志に殴り掛かつた。瞬間、秋志に倒される。彼は、腕を振りぬいたのかもわからないスピードで、その男を倒してしまつた。

「終了」

なんてことのない風に言つて、手に巻いた包帯のようなものをくるくると手から外し、それを小さく丸める。その光景に黙つていられないくなつた三人は、そこから飛び出した。

「テメー、どういうことだ！」

「俺らに説教しといて自分は勝手かヨ！」

「結局あたしら騙してたわけかよ！」

飛び出してきた三人に秋志は多少の驚きを顔に出して、苦笑した。「おうおう、そろそろとサークスか、オメーらは。ちつと静かにしろ。こいつを引き渡すまで待つてろ」

「引き渡す……？」

春一達が何事かと目を向けていると、秋志はどこかへと電話をして、所在を告げた。短く一、三言述べて切る。

その後でその男の後ろ手を縛りつけてそこから少し離れた、自動販売機とベンチがある場所に移動した。

「ホレ」

「！」

秋志がアイスの販売機でストロベリーのアイスを買って琉妃香に投げる。その後でクリーミーソーダを丈に、抹茶を春一に投げて寄越した。

「何のつもりだテメー！餌付けしようつて気力！」

「餌付けって！お前ら本当にサークル？」

食つて掛かる丈に、秋志は腹を抱えて笑つた。春一が我慢ならない風に、アイスを秋志に投げつける。全力投球をしたのに、それはいとも簡単に取られた。

「食い物は粗末にするもんじゃねーゼ」

「そんなもんいらねー。それより、説明しろ！」

春一が怒鳴ると、秋志はふつと笑つてベンチに座つた。

「座れよ。一から説明してやる。尤も、信じるかどうかはオメーラ次第」

そこで秋志は、妖怪について語り始めた。そして自分がつけていた呪符のこと、枢要院のこと。自分が彼らに頼まれて妖万屋をしていることも。

秋志は三人が妖怪と関わることに気付いていた。勘のいい人間ならばわかるのだが、秋志にはそれがとても強く感じられた。まるで、秋志に「気付け」と言わんばかりの強さだった。

そのサングラスの奥の瞳は、三人の反応を楽しむかのように常に愉快そうだった。が、それは三人に見えるはずもなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0948y/>

---

TRUMP?

2011年11月23日16時46分発行